



西山文庫の新たな展開を

塩崎賢明 (西山文庫理事長)

4月に安藤理事長が急逝されたため、6月の総会・理事会において理事長に選任され、4代目の文庫の代表者となりました。文庫には設立当初からかかわってききましたが、こういうことになるとは思ってもみませんでした。これまでの理事長のように確固とした方針を持っているわけではありませんが、皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。総会では、今年度は昨年度と同様の活動方針が採択されるとともに、今後の西山文庫のあり方について議論し、方針を定めていくことが確認されました。

西山文庫のこれまでを振り返ってみますと、1995年7月に誕生して以来11年になります。この間99年にはNPO法人として認可されています。当初、西山先生の残された膨大な資料をどうするか(保存・活用か、処分か)といった問題を乗り越えながら、物的にも組織的にもよくここまで来たものだと思います。私自身は、一貫して資料保存派の立場をとってきましたから、資料館づくりには根拠はないものの自信があり、何とかなるだろうと思っていました。西山先生の資料を処分するなどということはあり得ない(あってはならない)と信じきっていた

わけです。幸いにも積水ハウスの援助を得ることができ、この目標は概ね、三村運営委員長長の時代に形をなしました。これを生成期とすれば、広原理事長の第2期(発展期)には、NPOになったこともあり、さまざまな発信活動を展開し、今日の活動スタイルの基礎ができました。安藤理事長は今後は確立期だと捉え、研究・啓発活動、出版活動、研究ミュージアムの確立などを構想していたようです。

今後の西山文庫の活動は、これまでの成果の上に立って発展させていくべきですが、その際文庫を取り巻く客観的条件を踏まえる必要があります。その最も中心的な問題は財政基盤とメンバーの高齢化です。文庫の活動は、NPOであるからほとんど無償のボランティアで支えられています。これまでの活動内容をみると、全くのボランティアでよくこれだけのことができたものだと、驚嘆します。これは、西山先生の(残した)底知れぬパワーの所産であろうと思えます。死後10年を経ても、弟子や教えを受けた者を動かす力がインパクトがあったということでしょう。しかし、その弟子も急速に高齢化しており、4代目の理事長となった小生も還暦目前です。いつまでも現状のような活動を維持することは不可能です。世代交代が不可欠ですが、さて西山パワーはどの世代まで通じるかということが問われます。

NPO西山文庫の定款には「本法人は、わが国の住宅研究の礎を築いた故京都大学名誉教授西山卯三が生涯にわたって蒐集・創作してきた研究資料を基礎として、広く内外の関連資料を蒐集・整理して専門家・学生・市民に公開するとともに、すまい・まちづくり研究に関する交流ネットワークの強化充実、セミナーやシンポジウムの開催、相談や研修の実施、調査・研究の受託、研究成果の出版などの諸事業を行なうことによって、今後のすまい・まちづくり研究の発展に貢献し、もって人と環境にやさしい生活

もくじ

西山文庫の新たな展開を	塩崎賢明	1
トピックス / 中越大震災後、2度目の冬を越えて	中出文平	3
フォーラム / 地域性・公共性・集住デザイン	檜谷美恵子	6
会員だより / 「半顧半望」の「つながり」計画学	西村一朗	13
「人と住まいと社会を考える」研究部会 / 21世紀における居住者のライフスタイル動向と住宅・住宅地の行方	高城亮一	14